

チェコの日本びいきフロウハと日本のおとぎ話

佐藤雪野

1. はじめに

チェコにおける日本への関心は、他のヨーロッパ諸国と同様に、「黄金の国ジパング」のイメージや、17世紀からヨーロッパに輸入された日本製磁器や日本製漆器により生み出されたものといえるだろう。実際にチェコ人の来日の道が開かれたのは、日本の開国と1869年の日墺洪修好通商航海条約の調印による。当時のチェコはオーストリア＝ハンガリーの一部であり、オーストリア＝ハンガリー国民として来日することが可能になったのである。

その後、第一次世界大戦をはさみ、来日したチェコ人のうちには、「日本びいき」とも「日本マニア」ともいえる人々があり、彼らは、日本の事物の収集や日本事情の紹介に努めた。本稿では、その中でも最も多作であったジョー（ヨエ）・フロウハ Joe Hloucha¹を取り上げ、彼が日本のお伽噺をどのように知り、チェコに紹介したかを、具体的な物語を例に考察する。

2. フロウハの生涯²

1873年にウィーン万国博覧会が開催され、前述のように既に日墺洪友好通商条約を結んでいた日本も、初めて万博に公式に参加し、その出品物は、耳目を集めた。一部の出品物は開催国に買い上げられ、帝室・王室工芸美術館を経て、現在はオーストリア応用・現代美術館の所蔵になっている。万博の際、岩倉米欧使節団もオーストリア＝ハンガリーを訪問し、その際、現在のチェコにも技術研修生を派遣している。

当時のチェコでは、チェコ・ナショナリズムから、ドイツ語に対してチェコ語の地位向上を求める運動が高まっていた。1880年、オーストリア首相ターフェ³は内務省・司法省令（ターフェ言語令）を發布し、両省のボヘミアにおける外務公用語（住民と窓口の交渉語）として、ドイツ語に加えてチェコ語を採用した。フロウハが生まれたのはこの時代である。

フロウハは、1881年9月4日、チェコ中部ムラダー・ボレスラフ Mladá Boleslav⁴市近郊ポトコヴァーニ Podkován⁵で生まれた。本名ヨゼフ Josef は、父の名を継いだものである。母はアナ Anna（旧姓マトウシュコヴァー Matoušková）といった。父ヨゼフはビール醸造人で、フロウハは、9人兄弟の3番目だが、4人は夭折し、本人以外に、姉アナ（母の名を継いだ）、兄カレル Karel⁶、弟イジー Jiří、妹イジナ Jiřina が成人した。

1885年、一家はチェコ北部リボホヴィツェ⁷へ移転し、フロウハはそこで初等教育を受け、中等教育はムラダー・ボレスラフのギムナジウムで受け始める。父ヨゼフは、1887年から92年の間、リボホヴィツェのビール醸造所を年3400グルデンで借り、経営していた。

1895年、一家はプラハに移転し、フロウハはプラハのマラー・ストラナのギムナジウムに転校した。その後、チェコスラヴ商業専門学校⁸で2年学んだ。父ヨゼフは、1895年から1910年まで、プラハ最古の聖トマーシュ醸造所⁹を借り、経営した。そのうち、1896年から1906年ま

では醸造人も務めた。

1899年、フロウハは、商業専門学校を卒業し、その後、プラハ大学（大学は1882年にドイツ部とチェコ部に分かれていた）の会計講座で2年学び、官吏を目指した。1903年、ボヘミア王国領邦委員会¹⁰で官吏として働き始めた。ナープルステク博物館¹¹でも活動した。

1905年、処女作『嵐の中のサクラ *Sakura ve vichřici*』を出版した。この本は、版を重ねる人気作となったが、日本滞在の日記の形式をとっているものの、この時点では、まだフロウハは来日していない。来日したのは、翌1906年で、この年、第二作『洪水 *Zátopa*』も出版している。この最初の日本訪問では、同胞のヤン・レツル *Jan Letzel*¹²（1880-1925）、カレル・ヤン・ホラ *Karel Jan Hora*¹³（1881-1974）とその夫人竹本フク¹⁴（1880-1865）と交流した。また、日本女性タマと滞日中の契約結婚をし、同棲した。

帰国後は、作家活動、美術品の収集活動に専念していたが、1908年、プラハ商工会議所記念博覧会で兄カレルと共同で茶店「ヨコハマ」を出店した。着物姿のチェコ人ウェイトレスが日本茶と父ゆかりの聖トマーシュ・ビールを給仕し、好評を博した。その後、ヴァーツラフ広場のルツェルナ宮殿¹⁵に移転し、第一次世界大戦に至るまで営業を続けた。1908年には、『日本の思い出 *Vzpomínky na Japonsko*』も出版した。

1910年、『私の「菊夫人」 *Moje „paní Chryzantéma“*』を出版した。1912年、北アフリカを旅行し、同年、『死の接吻 *Polibky smrti*』を出版した。

1914年から18年の第一次世界大戦を経て、1918年にチェコスロヴァキアが独立したため、フロウハはオーストリア＝ハンガリー国籍からチェコスロヴァキア国籍となった。1920年、『恐怖の館 *Pavilon hrůzy*』、1923年、『見知らぬ人の手紙 *Dopisy neznámého*』を出版した。

1924年、プラハ近郊ロストキ *Roztoky* の邸宅をコレクション収容のために購入し、日本風に改築し、サクラ館と名付けた。しかし、1926年、再度の日本旅行の旅費のため、サクラ館を売却し、買い手はホテルとして使用した。この建物は社会主義期には老人ホームなどとして使用されたが、現在も日本風の外観を保っている。この年、『日本の子供のおとぎ話 *Pohádky japonských dětí*』¹⁶を出版した。

1929年には、『神と鬼の間 *Mezi bohy a démony*』、『微笑みの売り子 *Prodavačky úsměvů*』を出版したが、世界恐慌により生活が苦しくなり、1930年、ベルリンのオークションでコレクションの一部を売却した。1931年、『日本のかわいい女たち *Japonečky*』を出版した。

1937年、女優ビェラ・トリングレロヴァー *Běla Tringlerová*（1914-1988）と結婚したが、2年後に離婚した。この年、チェコスロヴァキアはナチ・ドイツにより解体され、第二次世界大戦が始まった。

大戦中の1943年、コレクションの一部をナープルステク博物館と邦博物館に売却した。1944年、『日出ずる国のおとぎ話 *Pohádky slunného východu*』¹⁷を出版した。

共産党クーデタ後の1948年、残りのコレクションを国に売却しようと試みるが不調に終わり、結局、1955年、コレクションを国家に寄贈し、代償として終身年金を得ることになったが、2年後の1957年6月13日、プラハで死去した。死後、日本関係の主要蔵書は東洋研究所が引き継いだ。

3. フロウハの日本及び旅への関心

フロウハ以前に日本を旅行したチェコ人に、1893-94年に日本など各国を旅行したコジェンスキー *Josef Kořenský*（1847-1937）¹⁸がいるが、彼は、フロウハの叔父にあたる。フロウハは、ギ

ムナジウムの学生時代から、コジェンスキーの影響で日本に関心を持ち、コジェンスキーの『世界旅行 Cesta kolem světa』(1896)を愛読した。フロウハの日本語は独学だった。

コジェンスキーは、フロウハの故郷に近いムラダー・ボレスラフ地域のスシュノ Sušno 村の貧しい農民の子として生まれるが、プラハで教員としての教育を受けることができた。1867年から教員助手として働き始め、1874年からプラハ・スミーホフ Smíchov 地区で正規の教員として働き、後にスミーホフのギムナジウムの校長にまでなった。少年期のフロウハの愛読書、『世界旅行』は、1893-94年に敢行した世界旅行(ブレーメン、ニュー・ヨーク、アメリカ合衆国、ハワイ、日本、中国、インド、セイロン、エジプト)¹⁹を記したものだ。

2回目の1900-01年の世界旅行(ナポリ、セイロン、オーストラリア、タスマニア、ニュージーランド、サモア、トンガ、オーストラリア、セレベス、ジャワ、シンガポール、中国、日本、朝鮮、シベリア、ウラル)でも日本を訪問したが、この時の旅行記が『地球の裏側へ K protinožčům』(1904)である。

彼は、これらの旅行を基に、教育者として、各地の事情を個別に紹介した書物(地理書)も多数書いた。『世界旅行』の日本の部分は『ジャポンスコ Žaponsko』という独立の出版物としても発行(1985年に邦訳、2013年に英訳)された。『2回目の日本 Po druhé v Žaponsku』(1910)は少年向け書物として出版された。

その他、医師でアフリカ旅行家のエミル・ホルブ Emil Holub (1847-1902)、旅行家で写真家のエンリケ・スタンコ・ヴラース Enrique Stanko Vráz (1860-1932)の影響も受けて、フロウハは旅行家になったとされる。主としてアフリカを旅行したホルブは来日しなかったが、ヴラースは、1895-97年の世界旅行(アメリカ合衆国、日本、中国、シンガポール、ボルネオ、ニューギニア)で来日し、多くの美術品を購入した。

フロウハも他の旅行記作家たちも特に言及しなかったが、当時の彼らの国オーストリア=ハンガリーの皇太子フランツ・フェルディナントの日本旅行²⁰から影響を受けて、彼らの日本旅行が計画された可能性も高い。旅行者たちの訪問先の選択や美術品購入に、フランツ・フェルディナントの旅行が影響しているのではないだろうか。もちろん、フランツ・フェルディナントも、チェコの旅行記作家たちも、当時、外国人に一般的だった旅行先を辿っていたともいえるが。

フランツ・フェルディナントの旅程は以下のとおりで、長崎から東京への移動の際に、主要な観光地を訪問し、多くの美術品を購入した。1889年に全線開通した東海道本線の恩恵を受け、移動速度が速い。

長崎 1893年8月2日～8月4日
 熊本 1893年8月4日～8月5日
 下関 1893年8月5日～8月6日
 宮島 1893年8月6日～8月7日
 京都 1893年8月8日～8月10日
 大阪 1893年8月10日
 奈良 1893年8月10日～8月11日
 京都 1893年8月11日～8月14日
 大津 1893年8月14日
 岐阜 1893年8月14日
 名古屋 1893年8月14日～8月15日

宮ノ下（箱根） 1893年8月15日～8月17日

東京/横浜 1893年8月17日～8月18日

東京 1893年8月19日～8月20日

日光 1893年8月20日～8月22日

横浜 1893年8月22日～8月24日

フロウハの第1回目の日本旅行の訪問先は確定できないが、『神と鬼の間』によると、第2回目の旅行では、東京、中禅寺、奈良、広島、大阪、京都、熊本、鎌倉を訪れていて、フランツ＝フェルディナントの旅行先と重なる。

4. フロウハの日本もの作品の特色と『日本の子供のお伽噺』

第2章で言及したフロウハの「日本もの」作品のうちの小説は、私小説的で、自身の日本での体験を題材に小説として描かれている。一番普及した処女作『嵐の中のサクラ』は、日本旅行の日記の体裁をとっており、途中の版から日本画家梶原緋佐子（1896-1988）の絵が入るようになった。日本旅行後の「日本もの」作品は、旅行記風のものとは小説風のものとは異なり、日本の昔話の翻訳も含め、文中に日本語の単語や短文を挟み、エキゾチズムを鼓舞した。

旅行記風の作品に、『日本の思い出』『日本の子供のおとぎ話』、『神と鬼の間』、『微笑みの売り子』、『日本のかわいい女たち』、小説風の作品に、『私の「菊夫人」』、『見知らぬ人の手紙』、昔話の翻訳に、『死の接吻』、『恐怖の館 PAVILION HRŮZY』、『日本の子供のおとぎ話』、『日出ずる国のおとぎ話²¹』がある。

『日本の子供のおとぎ話』は、1926年の第2回日本旅行の結果で、同年に和紙風の表紙、和綴じ風の体裁で出版されている。2015年に復刻出版された²²。

単なるおとぎ話の収集・翻訳だけでなく、日本の家族の生活、家族の中の子供の地位、息子と娘の差異、家族愛を説明している。おとぎ話については、ヨーロッパのものとは大きな違いはなく、英雄、お姫様、お化けが登場し、動物が擬人化されるとしている。

前半の日本事情を説明している部分にも、様々な物語が紹介されているが、源頼政、源頼光、金太郎（坂田金時）、源義経、弁慶、忠臣蔵など実在人物に関する物語が中心である。

おとぎ話として、紹介されているのは以下のとおりである。こちらにも実在人物に関する物語も存在する。

1. キチベイとキサブロウ
2. 兆殿司²³
3. ネンゴ滝
4. 雪女
5. 浦島太郎
6. 嫉妬深い隣人（花咲翁）
7. ミケンジャク（眉間尺）²⁴
8. 姫－ほたる
9. 桃太郎
10. 分福茶釜
11. シカヤ・ヴァソビヨイエ Šikaja Vasobijoje²⁵
12. おしゃべりカタツムリ²⁶

13. はちかつぎ姫
14. こぶとりじいさん
15. 舌切り雀

5. 「姫—ほたる」

では、フロウハは、日本のおとぎ話の情報をどこから得たのであろうか。そこで、余り一般的に知られてはいないと思われる「姫—ほたる」の物語から考えてみたい。

「姫—ほたる」の物語をフロウハは、以下のように書いている²⁷。

越前にある福井城の深い堀の中、竹と椿の藪の陰で、力のある王「火王」が、螢の民を治めていました。王には、薔薇のように美しい「ほたる姫」という一人娘がおりました。

可愛らしい姫は、とてもやさしく、素直で、お手本のような娘でした。その上、たいそう美しかったので、たくさんのお金持ちが姫の婿になりたがりました。しかし、姫はみな断りました。螢族の若い侍、勇敢な「火麿」に心を決めていたからです。

「螢姫」はふるさとで幸せでした。暗くなると、母や侍女たちに伴われて、国を飛び回りました。緑の田んぼ、湖やお寺の蓮の茂った聖なる池などすべての水辺、お城のお堀の緑の木々などを訪れました。

姫はだんだん大人になり、小さな体は金色の光を発し始めました。それは、大人になった印で、父王は、姫が自分の意志によって結婚することを許しました。婿の大群も押し寄せました。

ほとんどすべての虫たちが姫の黄金の光とすばらしさに引き寄せられ、結婚を申し込みました。色鮮やかな蝶、トンボ、黄金虫、灰色の蛾、夜の蛾など、早い話、翅のあるものはすべて飛んできました。

姫は、彼らの、終わりのない褒め言葉にもう疲れてしまいました。何とかそれを終わらせようと決心しました。彼らに向かって言いました。

「皆様、皆様の褒め言葉と愛はともうれしいです。でも、私は、私の光と同じような火を持ってきてくださった方だけに夫になってほしいのです。」

求愛者たちは、一斉に四方八方に飛び去りました。

或る者たちは人間の住まいに飛んでいき、明るくなった障子に突っ込み、頭を傷つけました。部屋の中に入ることができた者も、可愛そうに、明かりの炎の中で死にました。他の者たちは開かれた寺に飛んでいき、固い鉄の灯籠を、翅で無駄にたたいたり、祭壇のろうそくや熱く燻っている線香で翅を焼いたりしました。また、他の者たちは、炭の煙から火花を飛ばそうと試み、その中で死にました。或る者たちは、樹齢100年の輝く樹の中や海岸の火のともった小屋で、無駄に光を探しました・・・誰も、「螢姫」の輝きのような光を持って、彼女のもとに帰ってはきませんでした。このようなことが毎日続きました。

その間に「火麿」王子は大人になり、強くなりました。彼の肌着は、姫の光と同じくらい美しい光を発し始めました。

彼は、「火王」の前に出、ひざまずき、姫に求婚しました。

すぐに素晴らしい結婚式が祝われました。幸せな姫は、彼女のために死んだ気の毒な求愛者たちを思い出しませんでした。

それで、日本の女の子たちは、蛍を小さな竹籠に捕まえておくそうです。それによって、愚かな虫の求愛者が確実に死ぬことから守りたいのです。しかし、それも無駄なことです。毎日数千の虫がろうそくや灯かりの炎の中で死にます。

朝、寺で僧が祭壇を掃除したり、女性や女の子が住まいの部屋を掃除したりするとき、灯かりの下で焼け死んだ虫を掃きながら、ため息をつきます。

「また、昨日『蛍姫』に求愛者がきたのだから。」

「ほたる姫」の物語は福井が舞台であるが、近年、福井でこの物語の絵本が出版された。2016年7月10日付『中日新聞福井版』によれば、「幕末の福井藩に招かれた米国人講師グリフィス²⁸が創作した昔話「ほたる姫」を福井市文京一丁目下條雅史(まさふみ)さん(60)、英子さん(58)夫妻が日本語に訳し…」とある。福井では、グリフィスのおとぎ話の絵本シリーズを企画しており、これがその第1作となる。

それでは、フロウハは、グリフィスのおとぎ話を読んで、「ほたる姫」を採用したのだろうか。グリフィスに関しては、山下英一の研究²⁹が詳しいが、山下はグリフィスの出版した3冊の日本おとぎ話を以下のように、整理している³⁰。

- ① *Japanese Fairy World. Stories from the Wonder-lore of Japan*, 1880年出版、35編の物語を掲載。
- ② *The Fire-Fly's Lovers and Other Fairy Tales of Old Japan*, 1908年出版、20編を掲載。①より18編を除き、3編を追加。
- ③ *Japanese Fairy Tales*, 1923年出版、28編の物語を掲載。①より17編を除き、②で追加された3編と新しく7編を追加。

「ほたる姫」は3つの出版物すべてに採用されている。そのうち、②は、『日本のおとぎ話 *Japonské pohádky*』としてチェコ語訳が出ている³¹。出版年の記載はないが、チェコ国民図書館のカタログによると、1911年の出版である。訳者のパヴラ・モドラー *Pavla Modrá* (1861-1940) は、作家、翻訳家としてよく知られた人物で、この翻訳も、原文に忠実で自然な訳になっている。

②から訳出したグリフィス版の蛍姫は以下の通りである。

「蛍の求愛者」

越前の福井城の南の日の当たる側の堀では、以前から水が浅くなっていて、睡蓮が茂るほどだった。貝の縁のように桃色の花びらの、大きな花の一つの芯の奥深くに蛍の王「火王」が住んでいた。彼の一人娘が美しい「蛍姫」である。子供の時、「姫」(プリンセス)は、睡蓮の桃色の花びらの中の家に注意深く留められており、父が旅へと飛び去るのを見送る時を除いて、縁にすら出てこなかった。彼女は、火が彼女自身の体の中で輝き、美しく睡蓮を照らし、夜のその光が珊瑚の球の中の灯かりのようになるまで、おとなしく待った。

毎晩彼女の光はますます明るくなり、とうとう金のように輝いた。そこで彼女の父は言った。

「私の娘は成長した。時々私と一緒に外の世界へ飛ぶのがよかろう。そして、求婚者がきたら、彼女の意思にそう人と結婚するのがよかろう。」

そこで「蛍姫」は、お堀の睡蓮の中を出入りして飛び、それから田んぼへ、そしてついに遠くの藍の畑にまで飛んでいった。

夜に飛ぶすべての虫を引き付ける不思議な力を持っていたので、彼女がいつ出かけても、求婚者の群れが彼女を追った。しかし、彼らの注視を彼女が気にかけることはなかった。そして、彼女は彼らすべてに丁寧にしたが、誰にも励みとなるような答えは与えなかった。しかし、ぴかぴかの翅の伊達男たちは彼女を男たらしと呼んだ。

或る晩、彼女は母親の王妃に言った。

「私はたくさんの賞賛者に会いましたが、その誰をも夫にしたいとは思いません。今晚、私は家にいます。もし、そのうちの誰かが本当に私を愛しているなら、ここへ来て、私に言い寄るでしょう。そうしたら、私は、不可能な試練を彼らに出します。もし、彼らが賢ければ、それをしようとはしないでしょう。そして、もし彼らが自分の命を私より愛しているのなら、私はそんな誰をも欲しません。試練に成功した人を私は花婿とするでしょう。」

「お前の望むように、わが子よ」と母親の王妃は言った。そして、娘を最もまばゆいドレスで着飾らせ、睡蓮の芯の玉座に座らせた。

それから、彼女は守衛に、すべての求婚者を一定の距離まで下がらせておくように命じた。愚かな伊達男、光に目をくらまされたクワガタやコフキコガネが近くに寄りすぎて、姫を傷つけたり、玉座を揺らしたりしないためである。黄昏が消えるや否や、コガネムシがやってきた。おしべの上に立ち、丁重にお辞儀して言った。

「私は、緑金脚です。私の家、財産、愛を蛍姫（プリンセス）に捧げます。」

「行って私に火を持ってきてください。そうすれば、あなたの花嫁になります。」と「蛍姫」は言った。

頭を下げてから、コガネムシは翅を広げ、いかめしい羽音と共に去った。

次に、翅と体が灯かりの煙のように黒いセンチコガネがきて、まじめに情熱を語った。

「私に火を持ってきてください。そうすれば、あなたは私を妻とします。」

センチコガネは羽音とともに飛んで行った。

すぐに緋色のトンボが、その豪華な色で姫が魅惑され、直ちに彼を受け入れることを期待してやってきた。

「あなたの申し出をお断りします。」と姫は言った。「でも、もしあなたが私に火のきらめきを持って来れば、私は花嫁になるでしょう。」

トンボが用向きのためにすぐ飛んできた。激しい羽音のカブトムシは、熱狂的に求婚した。

「あなたが火を持って来れば、私は『はい』と言います。」ときらめく姫は言った。

蛍の王の娘に求愛するため、求婚者は次々と現れた。すべての花びらに彼らは印をつけるように、次から次へと長い行列になって現れた。それぞれが、自分のやり方で、誇らしく、謙虚に、大胆に、穏やかに、おべっかを言ったり、自慢したり、涙さえも見せて、愛を差し出した。自分の地位を話したり、財産を長々語ったり、忠誠を誓ったり、歌を歌ったり、音楽を奏でたりした。彼女を愛するそれぞれの者に、娘は控えめな声で同じ答えを返した。

「火を持ってきてください。そうすれば、あなたの花嫁になります。」

そこで、競争相手には話さず、それぞれが秘密を保持しつつ、火に向かって急いで行った。

しかし、誰も娘と結婚するために、戻ってこなかった。ああ、気の毒な求婚者たちよ。カブトムシは近くの家光輝いている障子に向かってぶーんと飛んで行った。あまりに情熱でいっぱいだったので、木や鉄のことを考えず、頭を釘に打ち付け、死んで地に落ちた。

黒い虫は、貧しい学生が読書している部屋に飛んで行った。彼の灯かりは髓でできた芯のある菜種油でいっぱい陶器の皿にすぎなかった。油のことを考えずに、失恋した虫は、炎に達するために皿に入り、数秒で油に溺れた。

「なんじゃろ？」針を手に持ち座っていたつましい主婦は、彼女の灯かりが明るくなり、煙突に煙が出て、音をたてた瞬間に言った。焦げたかけらを取り出したとき、緋色の翅がすべて焼け落ち、身も焼かれたトンボを見つけた。

輝かしいスズメガは、恋に狂っていたが、それでもまだ火を恐れつつ、姫のための火を得る決意をして、ろうそくの炎の回りを飛び続け、だんだん近寄ってきた。

「今を逃したら、二度とない。姫か死か」と彼は羽音をたて、炎の閃光をとらえるため、飛び込んだ。しかし、翅をこがし、助けもなく倒れ伏し、もがき苦しんで死んだ。

「本当に何て愚かなのだらう」と醜い衣蛾がその場にきて言った。「私は火をとれるだらう。私はろうそくの中に入る。」彼は中空の中の紙の芯を登り、ほとんど頂上、中空の炎の青い部分まできたが、その時、人が芯をかぎ、彼をつぶして殺した。

火王の娘に対する求愛者の運命は、全く悲しいものだった。或る者は岬の灯台の回りを飛んだ。或る者は仏教寺院の青銅の燭台に立っている高さ8フィートの巨大なろうそくの回りを飛んだ。或る者は、線香の上で花を焼いた。或る者は煙でほとんど窒息した。或る者は、一晚中、神社の燈明の回りを踊り飛んだ。或る者は墓地で墓の燈明を探した。或る者は、焼却炉を訪れた。或る者は、宴会の最中の台所を訪ねた。他は、煙突から流れ出す閃光を追った。しかし、誰も姫に火を持ってこなかった。或は愛の褒賞を得られなかった。多くは、触角を失い、輝く体をこがしたり、翅を焼いたりした。しかし、ほとんどは、ああ！翌朝、死んで黒く冷たくなって横たわっていた。

神官が神社の燈明を手入れし、召使が提灯を掃除するとき、それぞれが次のように言った。

「蛍姫（プリンセス）には、昨日の晩、きつとたくさんの求愛者がいたのだなあ。」

（中略）

翌日は大きな悲しみの日で、余りに多くの葬式があったので、城の北側の堀の蛍の王子、「火麿」が、召使に理由を尋ねた。そこで、初めて彼は輝く姫のことを知った。こうして、ちょうど父から王位を受け継いだばかりの王子は、姫に惚れ、結婚しようと決心した。彼は真の作法に基づき、父親のところに娘と結婚できるか尋ねるために、侍従を送った。父は、王子の求婚を、火を彼女のもとに手ずから持ってくるという彼女の命令に従うことを条件に、認めた。

そこで、王子は、彼の輝く軍隊の先頭に立って自らやってきて、睡蓮の宮殿を黄金の光の洪水で満たした。しかし、「蛍姫」はとても美しく、王子の栄光の炎の中でさえ、魅力が青ざめることはなかった。訪問は求婚で終わり、求婚に結婚式が続いた。約束の夜に、王子の軍隊のたいまつのみで、白い睡蓮の花びらでできた輿に載って、「蛍姫」は、王子の宮殿へと運ばれ、そこで王子と姫は結婚生活を送った。

（中略）

「火麿」と「蛍姫」が結婚してから、何世代も過ぎた。すべての蛍の姫の気まぐれにより、生まれの卑しい求愛者は愛のあかしとして火を持ってこなければならず、そうでなければ報奨を失う。他の光る美しいものは、求愛者のしつこさに死ぬほどうんざりしている。彼

らを魅惑した残酷だが美しいものを得るために、火を得ようとするむなしい希望のために、この火の探索で、蛍に魅入られた数千もの昆虫が焼け死んだのは大きな損失だ。このために毎晩昆虫は灯かりの炎の回りを飛び、毎朝、油に溺れたり、炎の中で焼かれたりした犠牲者の大群を灯かりから掃除しなければならなかった。そこで、若い女性たちは、昆虫の愛の戦いを見るために、蛍を捕らえて飼い、彼らのように火の中も水の中もものともしない勇気のある人間の求愛者を望んでいた。

越前、福井城という場の設定、ほたるの姫の愛を得る登場人物名を「火麿」としていること、求愛者の運命などから類推して、おそらく、フロウハは、グリフィスのおとぎ話を参照して、『日本の子供のおとぎ話』の「姫—ほたる」を書いたと考えられる。しかし、初めから姫の思い人として「火麿」が登場し、その後で成人した姫に多くの求婚者が現れるが、難題を出して様々な虫の求愛を退け、最後に本命の「火麿」が現れるという物語になっている。初めから「火麿」を愛しているのなら、他の求婚者に難題を出す必要がない。両親とも、姫の思うような結婚を認めているのであるから、求婚を退けるために、命を賭すような難題に取り組みさせるというのは、姫のよい性格と矛盾する。グリフィスの書いたように様々な求愛者が難題を解決できなかった中、最後に登場した「火麿」が難題を解決して、姫と結ばれるという物語の方が、説得力があるだろう。また、一度に大勢に火を持ってくるように命じる（フロウハ）より、順に個別に命じる（グリフィス）方が、物語としては面白い。これらの違いは、フロウハが、グリフィスの3分の1くらいの長さに物語を圧縮していることと、グリフィスの物語を要約しているために、先に結論を書いたといえるのではないか。また、蛍籠に蛍を買う理由については、二人の物語で異なっている。

グリフィスが、チェコ語訳を参照しているのか、英語の原本を参照しているのかについては、「蛍姫」の名の書き方が手掛かりになる。モドラーのチェコ語訳では、日本語の「蛍姫 Hotaru-hime」は用いず、プリンセス・ホタル *princezna Hotaru*、或は「ホタル」とだけ表記している。グリフィスの原本では「蛍姫 Hotaru-himé」としている。フロウハは「蛍姫 Hotaru-Hime」としており、英語の原本を参照していることが覗える。求婚者の虫の種類については、モドラーのチェコ語訳と一致しており、こちらも参照しているようである。前述のように、フロウハの蔵書は没後、東洋研究所に移管されたことになっているが、現在の東洋研究所図書館の蔵書目録には、英語原本もチェコ語訳もない³²。

石澤小枝子の明治期の日本昔話の外国語への翻訳についての整理によれば、ユンカー・フォン・ランゲック F. A. Junker von Langegg の『扶桑茶話 *Japanische Thee-Geschichten. Volks- und geschichtliche Sagen*』(Wien, 1884)にも「蛍姫の求婚者」が採用されている³³。

1872年、京都府のお雇い外国人医師として来日したユンカー（ヨンケル）による蛍姫の物語の舞台は京都御所であり、勝利する求愛者の名は「火太郎」である³⁴。求婚者たちの行動は似ており、たくさんの虫が翌朝死んでいることを、人々が嘆くことも共通している。ただし、蛍籠のエピソードはなく、ユンカーが、昔話の語りにも当時の日本の風俗の説明を組み込んだ³⁵ために、虫ではなく当時の人の結婚式の習慣の説明が多い。いずれにせよ、蛍姫の物語は、福井だけのものではなく、複数の土地で伝承されていたことがわかる。しかし、フロウハは福井を舞台にした。

5. 結びにかえて

日本びいきとして知られたフロウハは、日本の美術品のみならず、多くの日本に関する書物も収集していた。彼の日本紹介に用いられた知見は、日本での体験によるのみならず、豊富な読書によるところも大きかったであろう。それは、日本滞在前に、あたかも既に日本に滞在したかのよう『嵐の中のサクラ』を上梓したことからもうかがわれ、彼が訪問していない福井のおとぎ話の「蛭姫」を紹介したことも、彼の読書による知識の表れである。今後は、可能であれば、東洋研究所に収められたという彼の蔵書も検討し、フロウハがどこから日本に関する知識を得ていたのか、また、明治から戦前期に日本に滞在し、日本を紹介した外国人の直接的・間接的交流も明らかにしたい。

注

- 1 フロウハの本名は、ヨゼフ Josef である。ペン・ネームの Joe は、チェコ語の発音であれば、「ヨエ」となるが、日本では英語名として名乗ったと推察されることから、ここでは、「ジョー」を採用した。姓は、彼自身による漢字表記が「保呂宇波（ホロウハ）」であることから、チェコ語の発音で名乗っていた模様である。筆者自身やこれまで一般化している表記法に基づき、本稿では「フロウハ」とする。
- 2 本章及び次章は、主として以下を参照。
Kraemerová, Alice a Jan Šejbl, *Japonsko, má láska: český cestovatel a sběratel Joe Hloucha* (日本、わが愛：チェコの旅行家収集家ジョー・フロウハ), Praha, 2007.
Šmejkal, Josef Václav, *Milenec Nipponu – Tři lásky Joe Hlouchy* (ニッポンの愛人：ジョー・フロウハの3つの愛), Praha, 1931.
<http://www.prostor-ad.cz/pruvodce/psever/roztoky/hloucha.htm> (2018年12月10日最終閲覧)
Štráfěldová, Milena, „Japonsko: Velká láska spisovatele a cestovatele Joe Hlouchy“ (日本：作家・旅行家ジョー・フロウハの大きな愛) <https://www.radio.cz/cz/rubrika/krajane/japonsko-velka-laska-spisovatele-a-cestovatele-joe-hlouchy> (2018年10月25日最終閲覧)
- 3 Eduard Franz Joseph Graf von Taaffe (1833-1895) アイルランドに起源を持つ貴族。南ボヘミアに領地を持った。保守連合の「鉄の環」内閣を率いた。
- 4 19世紀からこの町では工場建設が進み、1865年に鉄道が到達した。1905年にラウリン&クレメント Laurin & Klement(現シュコダ自動車 Škoda Auto)の自動車工場が開設され、更に発展した。1880年の人口は約12,000人で、2015年の人口は約44,000人。
- 5 1434年創立のビール醸造所がある。1869年から1948年の国有化までは醸造家等組合による経営。
- 6 1880年2月21日、ポトコヴァーニ生まれ、1957年1月7日、プラハで死去。官吏、作家。チェコ SF の創始者のひとり。リボホヴィツェ Libochovice で初等教育、ムラダー・ボレスラフで中等教育を受けた後、1898-1901年、プラハ大学の法学部で学ぶ。卒業後、裁判所及び税務署で官吏として働く。1903年に処女作『運命のゲーム』を発表。
- 7 1880年の人口約2000人、2015年の人口約3500人。19世紀のリボホヴィツェには、1435年創立のビール醸造所が存在した。
- 8 1872年、チェコ語を教授語とする最初の商業専門学校として創立。現存。
- 9 1352年、聖アウグスチノ会修道院の醸造所としてカレル4世の勅許で創立。醸造は1951年まで。その後ピアホールとしての営業を経て、現在は高級ホテル。
- 10 1861-1918年、ボヘミア領邦議会の執行機関であり、地方自治機関でもあった。
- 11 1866年、民俗学者、作家、ジャーナリストのヴォイタ・ナーブルステク Vojta Náprstek (1826-1894) により創設。
- 12 1907年来日。広島「原爆ドーム」の設計者として知られる。第一次世界大戦中の帰国については諸説ある。1923年に最終的に帰国。
- 13 1905-1913年、日本滞在。レツルの共同経営者であったこともある。

- 14 竹本フクについては、吉澤脩子『フク・ホロヴァーの生涯を追って－ボヘミアに生きた明治の女』草思社、2002年を参照。
- 15 建築企業家ヴァーツラフ・ハヴェル Václav Havel (1861-1921) (ハヴェル元大統領の祖父) が建造。1907-1911年に建設。1909年に部分的に供用開始。
- 16 2015年復刻。
- 17 2015年復刻。
- 18 次節も参照。Štráfeldová, Milena, „Neznámý známý cestovatel Josef Kořenský“ (知る人ぞ知る旅行家・ヨゼフ・コジェンスキー) <https://www.radio.cz/cz/rubrika/krajane/neznamy-znamy-cestovatel-josef-korensky-1> (2019年1月31日最終閲覧)
- 19 コジェンスキーはヨーロッパの出発地や最初の到着地を都市名で書いている。次の旅でも同様。
- 20 安藤勉訳『オーストリア皇太子の日本日記』講談社、2005年。
- 21 日本以外の東アジアの昔話も含む。
- 22 2015年4月10日 *iDNES (Mladá fronta DNES 紙電子版)* にオンドジェイ・ベズル Ondřej Bezr による書評が出た。
“Joe Hloucha v roce 1926 tvrdil, že jsou Japonci nejhodnější na světě (1926年ジョー・フロウハは世界で最も善良な人間は日本人と強調)” http://kultura.zpravy.idnes.cz/joe-hloucha-o-japonsku-06v-/literatura.aspx?c=A150410_103304_literatura_ob (2018年10月25日最終閲覧)
- 23 室町時代の画僧。
- 24 春秋時代の中国の勇士。
- 25 今のところ、日本語表記不明。
- 26 「海月骨なし」や「猿の肝」と言われている物語の主人公をクラゲからカタツムリに置き換え。
- 27 Hloucha, Joe, *Pohádky japonských dětí* (日本の子供のおとぎ話), Praha, 2015 (1926), str.71-72.
- 28 William Elliot Griffis (1843-1928)。最初の在日は1870-74年(福井滞在は1871-72年)。二度目は1926-27年(福井には1927年)。オランダ改革派。理科教師として東京でも教える。日本関係の著書多数。
- 29 山下英一『グリフィスと福井(増補改訂版)』エクシード、2013年(1979年)
山下英一『グリフィスと日本—明治の精神を問いつけた米国人ジャパノロジスト—』近代文芸社、1995年など。
- 30 山下英一「グリフィスの日本昔話」(『若越郷土研究』53-2 (2009年)、238ページ。本稿では、3作品とも電子版を参照した。
- 31 原著者名は Griffis ではなく、Griffith と綴られている。
- 32 <http://katalog.orient.cas.cz/ou/g.htm#R> (2018年12月17日最終閲覧)
- 33 石澤小枝子『明治の欧文挿絵本ちりめん本のすべて』三弥井書店、2004年、270ページ。フロウハの『日本の子供のおとぎ話』(初版)は、ちりめん風の和紙に印刷され、和綴じの装丁である。
- 34 奥沢康正訳『外国人のみたお伽ばなし—京のお雇い医師ヨンケルの『扶桑茶話』—』思文閣出版、1993年、204-216ページ。『扶桑茶話』の原文は電子版を参照。
- 35 同書、6ページ。原文は電子版を参照したため、ページ不明。